

有機的な物になっていく グレーな市場を表舞台に



施井 泰平氏

現代美術家
スタートバーン株式会社 代表取締役

1977年生まれ。少年期をアメリカで過ごす。東京大学大学院学際情報学府修了。2001年に多摩美術大学絵画科油画専攻卒業後、美術家として「インターネットの時代のアート」をテーマに制作、現在もギャラリーや美術館で展示を重ねる。2006年にスタートバーンを構想し、還元金の仕組みについて日米で特許を取得。大学院在学中の2014年にスタートバーン株式会社を起業し、代表取締役に就任。2020年に株式会社アートビート代表取締役に就任。2022年には、東京大学生産技術研究所インタースペース研究センターリサーチフェロー、および東方文化支援財団理事に就任。

アートへの理解がない厳しい父親の下
自己肯定する手段のアートに魅力を感じた帰国子女
アートの価値担保へ無借金で起業
ブロックチェーンは将来間違いなく広がる
だから成功事例を作って魅力を正しく伝えたい

無機的なモノがあたかも 上場を目指して

新しい時代のアートを定義して後世に引き継ぎ
 ダ・ヴィンチが出来なかつたことをやる
 デジタルと物理の境界線がなくなる仮想現実の世界
 世界の隅々までアートが守られるツールを
 僕は最初から美術家そして最後まで美術家……



中野 善壽氏

東方文化支援財団 代表理事

1944年生まれ。伊勢丹を経て、婦人服専門店鈴屋へ転社、代表取締役専務就任。香港で仕事をし、1970年代、パリやニューヨークでも仕事をし、旅行が好きで世界100カ国以上を旅したことがある。退社後、1991年台湾に渡り、中国力覇集団百貨店部門代表就任、2002年遠東集団董事長特別顧問及び亜東百貨COO就任。2011年寺田倉庫代表取締役社長兼CEOとなり、拠点である天王洲アイルをアートの力で独特の雰囲気、文化を感じる街に変身させ、2019年退社。2015年より中華民国(台湾)文化部国際政策諮問委員(顧問)就任し現任。2018年モンブラン国際文化賞を受賞後、東方文化支援財団設立、代表理事現任。地域や国境を超えた信頼感の醸成をはかり東方文化を極めたいというビジョンを持ち活動。2021年8月ACAO SPA & RESORT代表取締役会長兼CEOに就任し現任。著書に「ぜんぶ、すてれば」(ディスカヴァー・トゥエンティワン社)、「孤独からはじめよう」(ダイヤモンド社)がある。

リアルとデジタルの境を越える
NFTという新技術

中野 本日の対談には、施井泰平さんを指名しました。現代美術家として活動しながら、テクノロジーでアートの課題を解決する、ということもやっておられます。どうぞ宜しくお願いします。

施井 お声かけいただいて光栄です。こちらこそ宜しくお願いします。

中野 施井さんと最初に会ったのはどこでしたかね？

施井 ずっと前から中野さんのことを一方的に存じ上げていて、中野さんが所属しておられた寺田倉庫の飲食店で、中野さんが通りすぎたのを見て「うわあ、中野さんだ！本物だ！」みたいな経験が2年程続いて、初めてお話しできたのは3、4年前ですね。そもそも我々がやっているのはアートのインフラ事業で、作品を登録したり、真正性を担保するために管理するような仕組みを作っています。寺田倉庫のアートの倉庫業との相性もいいし、協業できないか、もしかして投資を検討していただけないか、とか、あの手この手でお会い出来る機会を探していました。



施井泰平氏

中野 なかなか遠いらしくてね(笑)

施井 実在する人物だと思われていませんから(笑) それで、寺田倉庫の社員の方に仲介していただいております機会を得ました。中野さんはオーラに満ちているので、最初はお話だけで緊張しました。必死に自分の言いたいことをちゃんとお伝えする、ということに集中したのを覚えています。

中野 今はNFTというのは新聞にも出ていますが、当時は「よく判らないな」という感じでした。た

だ、一番心に刺さったのは、アート

というの1回売ってしまうと「モノ」になって死んでしまう、そしてすっかり投資対象の「モノ」になってしまう。そういう意味では、作品の真正性が判って履歴が判って、かつアーティストにキックバックがいくという、そうなると、アーティストにとつては1回渡したモノが実は遠くで生きているという感覚が味わえる、ということ、話の中から何となく理解しました。あの時はあまり要領を得ていませんでしたが、多分そうだろうな、と(笑)「すごいことを考えたな」と思いました。し

かもブロックチェーンと繋げて、ある意味、永遠の情報保管が安全にできやすい仕組みを活用していると、どこかで停電してもデータが飛んで情報がなくなるというようなことはないの、データセンター等で一括管理するよりは比較的安全なのだと……。ちょっと脱線しますが、日本の安全性というのは国民がそれぞれブロックチェーンのひとつひとつになって、お互いが監視し合っている、さすが、日本人はすごいこと考えると思えましたよ。

施井 確かに。日本はある意味においてブロックチェーンのような社会ということですね。面白いですね。

中野 施井さんに初めて会うまでは、40歳くらいのアーティストということくらいしか知らなくて「どんな人が来るのかな」と思っていたら、若々しくてね。若いというのは頭がちゃんと働いているから、それで「いいかな」と思ったのを覚えています。

施井 いろいろな方に事業の説明をしてきました。同年代の、しかもエンジニアでも理解がなかなか難しい領域という実感がありませんが、中野さんは10分程聞いて「これ、いい

ね」みたいな反応をいただきました。そういう方も全くなかったわけでもないのですが、業界全体を俯瞰して課題感を持っている方々は比較的理解が早い傾向がある中でも中野さんは断トツで早く、この方はオーラを下支えする何かがあるな、と思いました。

中野 私は直感で物事を見るタイプで、あまり論理的ではありません。ただ、施井さんの話している内容や伝わってくる波動のようなものは悪くないと感じました。実際は、当時会社が大変な状況だったと思います。波動が悪くなかったですよ。

施井 本当に大変な状況でした(笑)が、中野さんには結果的に投資もしていただき、役員としても参画していただきました。ビジネスの先輩でもありますし、対外的にも支援して下さっているような状況で、実際毎回お話をする時には、その圧倒的な人間力やカタチに現れないところでもとても支えていただいていると感じています。

中野 今日は改めていろいろ伺いたいのですが、まず、様々なバーチャルの世界の中でNFTが果たす役割

について聞かせて下さい。世の中の人は分かっていないようで、実際は分かっている非常に難しい世界だと思えます。あらゆる機会に説明をするということが大事だと思っている、できるだけ分かり易く教えてください。

施井 はい、NFT自体、特に今注目されているのはデジタル作品が絵画や彫刻などと同様に取引が出来るようになるという点です。そういうことを下支えする技術をNFTと呼んでいます。もちろん物理的な作品の管理にも向いていますが、少し複雑化するのでデジタル作品だけに絞



中野善壽氏

りますと、今迄のデジタル作品はパソコン上でコピーをして簡単に複製が出来てしまうところがありません。映像作品でもデジタル画像でも写真でも、なかなか資産性を帯び難いところがあつたのですが、それに対して1点物とか100エディションの中の1つなどと、「唯一性」を担保することが出来る技術なのです。無機質な「モノ」であつたデジタル作品が、あたかも有機的な「物」として扱える技術が生まれた、と。実は日本のアート市場の足を引っ張っていたのは輸送や関税で、実際に行かないと良いか悪いか分か

らない、或いはその作品が良いと判断した経緯が密室の政治であつたり。実際に行かなくてはいいけない、送らなくてはいいけない、物理的な世界の間が、インターネット上で全て完結させられるというところが、圧倒的な革命の部分だと思つています。

中野 特にデジタルアートにおいてはそうですね。

施井 元々僕達もブロックチェーンはデジタル作品と相性がいいのは分かっていたのですが、その需要が生まれるのにはもう少し時間がかかるなと思つていました。ところが、新型コロナウィルスが一気に広がって美術館もギャラリーもアーティストも活動が出来なくなつた。そこで自宅にいなが何をどう表現するかを模索していった結果、インターネット上で完結するようなアートが一気に花開いたというのが特徴だと思つています。

中野 昔、チャンネルのニセモノが出回つた時に「コピーされると」とはチャンネルがホンモノだという証」と言つた話は有名です。デジタルの世界では簡単にニセモノが作れ

るので、ホンモノを証明する手段が出来たということはすごく大事なことです。社会には「価値」というものがなくて、デジタルの中で価値を感じて、様々な人達がそこにまた別の世界を見出すような時代が来る時に、その価値を生むひとつの手段として、ホンモノであることを証明できるNFTというものが、多分相応な役割を果たせるのではないかと思います。

施井 一般的に、実在する「物」の方がいいという方の意見を考えてみますと、例えば自分の亡くなったおばあちゃんからの手紙には、その人の痕跡から味わいを感じて、遺族の中で評価されているところがあると思います。デジタルのモノには味わいが付き難いし実感も湧き難い。ただそれが電子署名で絶対に改ざんされないカタチで、「実は中野さんが150年前に登録した」ということが継承されていけば、そこにはモノと同様のオーラが出てくるのではないと思います。現代はLINEやメッセージジャーのようにテキストだけでなくコミュニケーションをする手段がかなり広まっていますが、そのテキスト

トの中でも、その人が生前に残した最後の言葉とか、人が動かされるのは結局情報の部分で、そこをちゃんと担保する技術があれば、モノでもデジタルでも同じ感動を与えることができ、資産性を持つことは可能だと、だんだん分かってきているのではないかと思っています。

中野 我々自身があまりこの価値を分かっていないという気がするのですが、どんどん発信した方がいいと思います。多分、これを発展させていくためには、「オリジナルはどれか」が重要になってきます。この、オリジナルを守る活動というのも一緒にやっていく必要がありますね。それを法的にも外交的にも担保できたら、素晴らしいと思います。

アートとビジネス 双方に携わっている理由

中野 施井さんは、ご自身も現代美術家です。施井さんは、ご自身も現代美術家というのには、自身の創作に重きを置いて、販売とか、購入された作品がどこに行っているのか、誰が所有しているのか、追いかければ分

かるのかもしれませんが、割とそういった部分に疎い方が多い気がします。施井さんのように、創作と作品の管理の両方に意識を向けているのは珍しいのではないですか。育ってきた環境に関係があるのでしょうか？

施井 それに関しては2点あります。ひとつは美術家として名を残すというより歴史に残る「いい作品を創っていい」ということを真面目に追求していく側面です。過去の歴史を見てみると、その時代の大きな変動を象徴するような作品が残っています。「いい作品」には様々な要素がありますが、特に歴史的に重要になるのは、その時代背景を最も象徴した作品です。僕は情報の時代に生きていますので、「情報の時代を象徴する美術家になりたい」と模索してきました。最初はインターネットを使った作品を創っていましたが、この時代にはもっと大きなダイナミズムがあるのではないかと、もつと根底の大きなパラダイムシフトを支える何かを提案するような作家でないという時代を象徴することはできない、というメンタリティーを得たの



泰平《IT》(2006)

です。今、ビジネスの領域で戦っていると思うのは、お金を追求するとビジネスにならないというか、やりた世界を追求するためにビジネスがツールになっていくのを、本当に強く感じています。以前は、ビジネスマンというのはお金を追っていくものだと思っていました。そうではなく、お金を集めてそれを如何に使っていくのが重要で、流通や評価の情報時代を象徴するインフラ構築に携われるということは、美術家としてこんなに嬉しい状況はありません。ですから、最初から美術家であるし最後まで美術家であるつもり

で、そこに矛盾は起きていないというのが実感です。

中野 そういう考えをお持ちになったのはいつ頃ですか？

施井 実は僕の父親はすごく厳しい人で、外資系の会社の社長をずっとやっていて、中野さんから「アートへの理解」を取り除いたみたいな人です（笑）。アートへの理解があつておしゃれだったら、理想的な父親なのですが、小さい頃から「お前が作っている作品はゴミだ、社会の為に何の意味も持たない」と言われてきました。最近では全面的に評価してくれるようになりましたが、5年くらい前まで「お前はアートがなければもっとビジネスで成功していただろう」という感じでした。そういう環境もあつたのかとも思いますが、どこかで文化もすごく重要だし、それをきちんと広めるにはそういう手続が必要なのではないか、というのもあつたような気がします。

中野 施井さんは幼少時代をアメリカで過ごされたのですか？ ずっと日本で育っていたらどうだったか、比較はできないかもしれませんが、その辺りの違いもあると思います

か？

施井 そうですね。アメリカの学校では「日本から来た人」という、とにかくコミュニティから浮いている存在だったので、自己肯定する手段としてアートに魅力を感じたということはあると思います。コミュニティはコミュニティの中に閉じ籠っていつて、例えばアートはアートの村の中でしかコミュニケーションしない傾向にあるかと思えます。アメリカの小学校においても日本の小学校にいても、いつも外のコミュニティにいる感じに違和感を覚えることはありましたね。そんな時に経営などのシステムは、そういったコミュニケーションを横断したコミュニケーションを可能にしていくような手段なのかなど思っています。

中野 「正義」と「常識」は人によって全部違います。この「正義」と「常識」の違いの中からオンリーワンというか、違うものに憧れるアートの世界が生まれるのだと思います。「正義」と「常識」の違う集団が山のようであつて、その環境はすごく大きな影響があるのかもしれないね。その中で、日本発のNFTのポジ

ションは本当に世界のスタンダードになるのでしょうか？ 施井さんの目線で、インフラとして絶対的な価値を生み出せるようになるのでしょうか？今のインターネット上の内容がそれに近い内容になるのかどうか、教えていただけますか？

施井 おもしろい質問ですね。NFTやブロックチェーンの世界のことを「WEB3.0」という表現をすることがあります。その前の「WEB2.0」は、いわゆる「GAF A（ガーファア／Google、Apple、Facebook、Amazon）」と呼ばれる大きな会社

がいろんなツールを提供して情報社会を牛耳っているような世界観でした。それに対してブロックチェーンの世界やNFTを支える基盤は、いろいろなプラットフォームが繋がっていく社会で、1社が独占するのではなく、どちらかという個人が繋がっていくとか、企業同士が共創するような、いわば非競争領域において有効と言われます。先ほど「日本社会はお互いに監視し合うブロックチェーン社会だ」とおっしゃいましたが、それ以前に日本をはじめとす

るアジア圏には「八百万の神々」とか一神教でない社会構造を自然に受け容れる素地があるのかなと思います。一般的なNFTはパブル的にすごく盛り上がりつつあって、短期的なマーケットではやはりアメリカの方が強いと思うことはありますが、長い目で見てNFTとかブロックチェーンの本質的な価値を捉えた取り組みというのは日本から出てくるだろうと思っています。その観点から見ると、社会的な制度とか許容度も含めて3歩も4歩もリードしているのではないのでしょうか。

中野 それは同感ですね。神々の棲む世界は東方文化地域に多いと思います。アフリカの奥地とか、いろいろありますが、基本的に比較的裕福で、ある程度世界を引っ張ってひとつの核になっていくのは東方文化地域なのです。アジアは多様化の権化のような所だと思います。その象徴が神々です。「神仏」と平気で言ってしまう。今もちょうど、Z世代のお坊さんに仏教論を語ってきましたけど……。

施井 お坊さんに仏教論とはすごいですね（笑）

中野 何だかよく分からないけれど、新入社員教育みたいな話になってしまつて（笑） アジアの宗教観というか、神々に対する考え方というの、本当にこのブロックチェーンに近いようなものがあると感じています。黙ってれば中心に行けそうな感じがしますよね。だからオリジナルジャンあるいはオールアジアで頑張らないと、と思います。

施井 NFTの中で盛り上がっているプロジェクトは、日本インスパイア系がすごく多いです。日本発のものも、実際に現状としてはありますが、ほぼレギュレーションが遅れているのが理由です。今の日本の税制ではNFTを売買するための仮想通貨を持っていたら、所持しているだけで最大55%の課税がなされ、場合によっては税金を払う現金がなくて破産してしまうというようなことが起きるのです。これは問題視されていて、岸田文雄首相も河野太郎大臣も「対策をする」という方向は示しています。現在の状況下では、かなりの自主規制の中でブロックチェーンならではの「やれること」

をかなり止められている状態です。その辺りの法的なレギュレーションが定まつて、日本人みんなが「大丈夫だよ」という空気感になったら、一気に広がっていくのかな、と思います。世界的に見ても日本インスパイアのものが沢山あつて、とても大きな市場を作っているのに、日本オリジナルのものは何故か少し刺激が弱いものになつてしまつて、不思議なところでは。

中野 ガバナンスサイドが遅れているのでしょ。もう少し決定権のある人が若者達と交わらないと駄目だと思えますよ。政治家と会うと、もう何を言っているのか、それで結論は……？です。社会変革を起こすには、女性や若手へ強引に変えていく必要があると思います。税制も全部そうです。ところで現実問題として、一般的にこのシステムを理解している人は、どのぐらいいるのでしょうか？

施井 肌感覚としては、2021年3月に行われたクリスティーズのオークションで、あるデジタルアーティストの作品が75億円で落札されてから一気に認知が広がりました。やはり

学ぶ層は結構お金にシビアで、購入した物が二次流通でちゃんと10倍、100倍になっていく。そういうお金目当ての人達が入つて、徐々になつていくという理解ができてきて、今広がってきているのだと思います。やはり、お金の魅力が中心になつていくことは否めません。本当の意味でのアーカイブ性とか社会性のような側面での理解はもう少し時間がかかると思えますね。

中野 直感ですが、多分まだ100万人もいないでしょう。ましてやこの世界の中で自分の生活の手段として、これを使おうと思つている人は更にその10分の1の10万人ぐらいしかないのではないですかね。

施井 ええ、かなりの確だと思えます。仮想通貨をやっている人が人口の2〜4%と言われていて、その内の2%ぐらいがNFTの購入経験があるという感じですよ。

中野 「難しい」とおっしゃる方も多いのですが、難しくありません。常識だとか何だとか言つて、情報を全部クローズしてしまつて、

す。これからの社会は、感性を研ぎ澄ませて心の扉を常にオープンにして受け容れないと駄目だと思えます。理性の力よりも感性の力の方が100倍強い、事実として私は感じてますし、理性は事実を感じる力が感性より小さいと思つてます。その意味では、感性が退化してしまつていく人が多いと感じますね。責任を取らない大人ばかりが有象無象いると、ブロックチェーンが成り立たなくなります。ひとりひとりが、小さな世界でいいからきちんと責任を取ることがブロックチェーンの肝要な部分です。

日本のNFTが世界に出ていくために

中野 スタートバーンは上場するのですか？

施井 はい、上場を目指しています。上場はいわゆる人間が審査をして、証券会社が仲介して、東証など世界中のいろいろな市場に株式を公開して、投資家がそれを買うようにするというシステムですが、これは面白いことに、実はブロックチェーン

ではほぼ全部こと足りる話なのです。信頼性がある仲介者を介さなくても、信頼性がある取引ができる仕組みなので、最終的には東証などもブロックチェーンを活用するようになるのではないかと思います。そこまでいくには10年、20年かかります。現段階でも、実はブロックチェーンだけで資金調達をする機能がありますから、上場ではなくてもブロックチェーンのひとつの仕組みで、上場市場がIPOに対してICO、IEOもしくはSTOなどと言われるのですが、これで数千億円を集めているような会社もブロックチェーンの世界では沢山生まれています。でも、ここでやり過ぎると法律がまだ追いついていないので、グレーとされている市場に対して戦うことになりません。岸田首相のスローガンに「新しい経済」というものがありますが、まさにその領域の本丸がブロックチェーンなので、2年或いは3年後に、東証がそういうことを認める可能性もあります。現在の市場の形かどうかは分かりませんが、いずれにしても市場で公開するというプロセスはやろうと思っています。

中野 スタートアップが市場公開するということには意味があつて、何となくグレーに見られているこの業界の中で、いろいろと苦労している仲間達が一気に表舞台に出られるということですよ。ですから、出来るだけ早く新しい形で、先程グレーと言っていた所と、今現実のリアルのと、真ん中辺りの所でいかれるといいと思っています。

施井 ハイブリッドで、ということですね。それが一番いいと思います。

中野 現在、施井さんの会社の社員の方は何人ぐらいですか？

施井 そうですね、70人ぐらいです。

中野 NFTの世界では、これに関わっている人はもっと多いでしょう？

施井 会社としては、日本国内でも100社ぐらいはあると思います。

中野 そうすると、多分ですが、関連している人達が5000人ぐらいはいますよ。スタートの段階で5000人の業界界人があるというのは、大きな可能性を持っているということだと思いますね。

施井 世界的に見ても、様々なNFTの会社があつて、その中で昨年最

も伸びた会社は、1年でメルカリの10倍ぐらいの規模感で、取引額は3兆円、4兆円規模になっています。市場自体が兆円規模で成長しているので、実際に岸田内閣が骨太とかの政策に組み込まないとまずいよね、というレベルまで、既に大きくなっています。他方で、NFTは仮想通貨と違うとは言つても、仮想通貨との関係性は深いからこそのいろいろな面白みもあるのです。2018年に日本でコインチェック事件がありました。580億円相当の「NEM（ネム）」が流出して、それ以降、日本の東証では仮想通貨の取引所は上場できないという風に明言されています。その後、世界的にはものすごく大きな会社が成立しているのに日本ではそこで止まってしまうので、やはり日本政府が法律を緩和しない限り、伸びないだろうと思います。でも、実は仮想通貨を世界で最初に認めたのは日本で、ものすごく大きくなりそうだったからこそ、それだけ大きな流出が起きてしまったということもあるのです。ほんとにもったいないし、盛り返して

いきたいな、と思います。

中野 日本人みんなが考えなければいけないのは、どんなことでも1回の失敗で人生の責任を全部取らせてしまうことです。こんなこと変でしよう？ 個人で企業を立ち上げて、1回倒産したらもう個人保証で立ち上らないですよ。それで能力を全部奪ってしまう。私は若いうちにそういうフィルターを通してしまふこと自体が、若い人達の芽を摘んでいるのだと思いますよ。大事なことは再チャレンジが可能な社会にしたいか、ないか。580億円程度の失敗で東証が全部クローズすること自体、問題です。全てにおいてそういう傾向があると思います。日本の一番駄目な所は、マスコミが「世間が」とか「社会が」とか言つて騒ぎますが、もしかすると100万人に2人しか言っていないようなことを100万人のうち90万人が言っているような印象を持たせてしまうようなところだと思います。何が「世間」で何が「社会」なのか、定義がありません。定義のない用語が堂々とまかり通つて、「これが国民の声だ」と言う。これをやっ

ているうちは駄目だと思えますね。
施井 「みんなが言っている」という……ね。

中野 「みんなが言っている、だから何？」ということですよ。この機に、こういう討論もみんなできなかったらいいですね。

施井 ブロックチェーンはインターネット以上にインパクトがあると言われていきますし、ブロックチェーンは間違いなく将来広がっていくと思います。一方で「規制を」という人の意見も分からなくはないのです。投資家をちゃんと保護しないといけないとか、詐欺の温床になっていくとか、いわゆる社会を良くしていくようなプロジェクトが少ないので、そういう点は僕達も支援できると思っています。ブロックチェーンは社会にとって明らかにいいものですか、悪い方に引張られてそちら側の印象ばかり強くなるよりは、もっといい成功事例を作っていく、こういう発信の機会にその魅力を正しく伝えていくことによって、そういう社会になっていったらいいなと思っています。インターネットに対してまだ懐疑的な人、例えばネットで重

要な情報をやりとりする、そういう所を疑わしいと思っている人はかなり多いと思います。ここがちゃんとセキユアになって信頼のある取引ができるようになれば、情報社会は本当にいいことが多いと思うのです。

良かれと思ったことがちゃんと「良かれ」のまま広がって行って、その間で悪いことを考える人が悪さのできない世界になっていく。「必要悪」みたいなものもあるとは思っているので、別に完全な「純粹」がいいという訳でもありません。社会にダイナミズムを起こす上での信頼性のようなのはブロックチェーンでしっかりと担保されるので、インターネットがより良いものになってくるだろう、と思っています。

中野 先程も言いましたが、日本の文化というのは元々ブロックチェーンなのです。だからこそ、こんなに素晴らしい安全性がキープできているのです。それを、その中でたったひとりや変なことしたらと言っていて、根本的な相互のブロックチェーン的役割を放棄するようなことをさせては絶対駄目です。そういう意味では、ブロックチェーンを一番理解

できるのは日本人の筈です。お互いが、それぞれ核なのですから。こんな素晴らしいことはありません。

施井 これを発明したのは誰か分からないのですが、発明者の名前はペンネームで「サトシ・ナカモト」という日本人の名前になっているのです。

中野 発明者は今も判らないのですか？

施井 ええ、発明者不明です。もう亡くなられているとも言われていますし、その人が持っているアカウントには数兆円相当のビットコインがあるのですが、この10年間くらい全く動かされていないので、その辺りは本当に興味深いし面白い謎になっていますね。

中野 そのうちに誰かが出てきて本でも書いて、ベストセラーになったらするかもしれませんね。

施井 もう既に何人かが「私がサトシ・ナカモトです」と言っていて出てきていますし、中野さんも言ってみてもいいかもしれないですね。「ナカノ」と「ナカモト」、名前も似ていますし（笑）

中野 いやあ、目立つと弱点を突か

れそうで怖くてね（笑）

施井 仕組みが言えない、みたいな（笑）

中野 いずれにしても、みんなが「知る」ということがまず第一歩です。だからきちんと論理的な説明はもちろん必要なのですが、私のように全部例えにしてもらわれないと理解ができないような人に対しての説明も必要だと思えます。技術的なことを教えてもらっても、本当にチンプンカンプンになってしまうので。今、現実の世界とは違う3次元の世界、仮想空間のサービスが本当に当たり前になってくる時代に突入すると思いますが、そこから先、どのように世界が変わってくるのでしょうか。

施井 本当に仮想現実というか、デジタルと物理の境界線がなくなっていくのではないかと思っています。今、ここに中野さんの「ホンモノがいる」という感覚がありますが、触ろうとしたら「スーッ」と透けてしまったり、眼鏡を取ったら消えてしまったり、あと空間自体がリアルなものもあればヘッドセットでのものとか、いろいろあると思います。ひと言でいうと、本当にデジタルと物



対談を終えて

理の境界線がなくなるのではないかと
いうことですね。少し前は、電
子書籍では本の体験と全然違って読
み難いとか、又どこまで読んだか判
り辛いとか、重みがないなどがあり
ましたが、本当に技術が進化し発達
すると、実際にページを捲って本を
読んでいるかの如く電子書籍を読め
るようになるでしょうし、重みも感
じられるというところまでになると
思います。僕はそこがスタート地点

だと思っていますが、まだ今はテ
クノロジーが発展途上なので、いろ
いろ煩わしいこともたくさんありま
す。パスワードを忘れるとか、ね。
本来は、誰もが何も考える必要がな
く、手に取ったらモノと同じように
ID登録も何も必要なく使える、と
いう世界がやり易いと思うし、又そ
うなっていくのではないかと思いま
す。

中野 私は結構パソコンを使ってい

ますが、パソコンの原理は何も分
かっていません。原理など分からな
くても、きつと施井さん達の技術を
自然に使っていく世代がどんどん増
えていくのでしょうか。そうすれば
結果的に「勝ちだ」という感じはし
ますけど、多分、そこまではほんの
5〜6年の苦労だと思っています。

施井 最初の3〜4年が一番大変

だったような気がしますね。無借金
で起業をして、何故かという借金
させてくれなかったからです。借金
もできないくらい信頼度の低いレベ
ルから始めたので、人を雇おうと
思っても全然入ってくれないとか、
入った人が社会経験がないとかで、
そうすると悪循環しかなくて……。
そこからどんどん会社を成長させて
いく最初の部分が一番大変でした
ね。今は、実力を問われるというか、
そういう変な大変さはないですが、
逆に自分が駄目だったら会社も駄目
になっていくので、言い訳無用のハ
ラハラ状態ではあります。

中野 では、最後に、施井さんの描
く未来について聞かせて下さい。

施井 やはり最終的には、自分の会
社において、又このインフラにおい

ては、本当に世界中の隅々まで、アー
トに触れるツールを提供したいと
思っています。今なら、ニューヨーク
に行かないとトップアーティスト
として成功できないとか、言います
ね。そもそもアートとは何か、多分
アフリカやアマゾンの奥地の集落に
住んでいる人は、見たことも聞いた
こともない状態だと思のです。で
も、集落で作ったものに美術館で収
蔵される程の価値が認められるな
ら、それ相応の貴重な品として扱わ
れるようになっていくべきで。その
為のインフラを隅々にまで行き渡ら
せたい、というのが会社としてのひ
とつのゴールです。でも、やはり自
分は美術家なので、その先には、い
かにアートというものを社会に根付
かせていくか、新しい時代のアート
を定義していくか、先輩達ができな
かったことをより大きくして後世に
引き継いでいきたいと思っていま
す。ダ・ヴィンチができなかったこ
とをやる、ということだ(笑)

中野 素晴らしい！現代のダ・ヴィ
ンチだね。

施井 これからも宜しく願いま
す。